



出雲コクの興亡と 四隅突出型墳丘墓

邪馬台国時代、そのとき出雲は

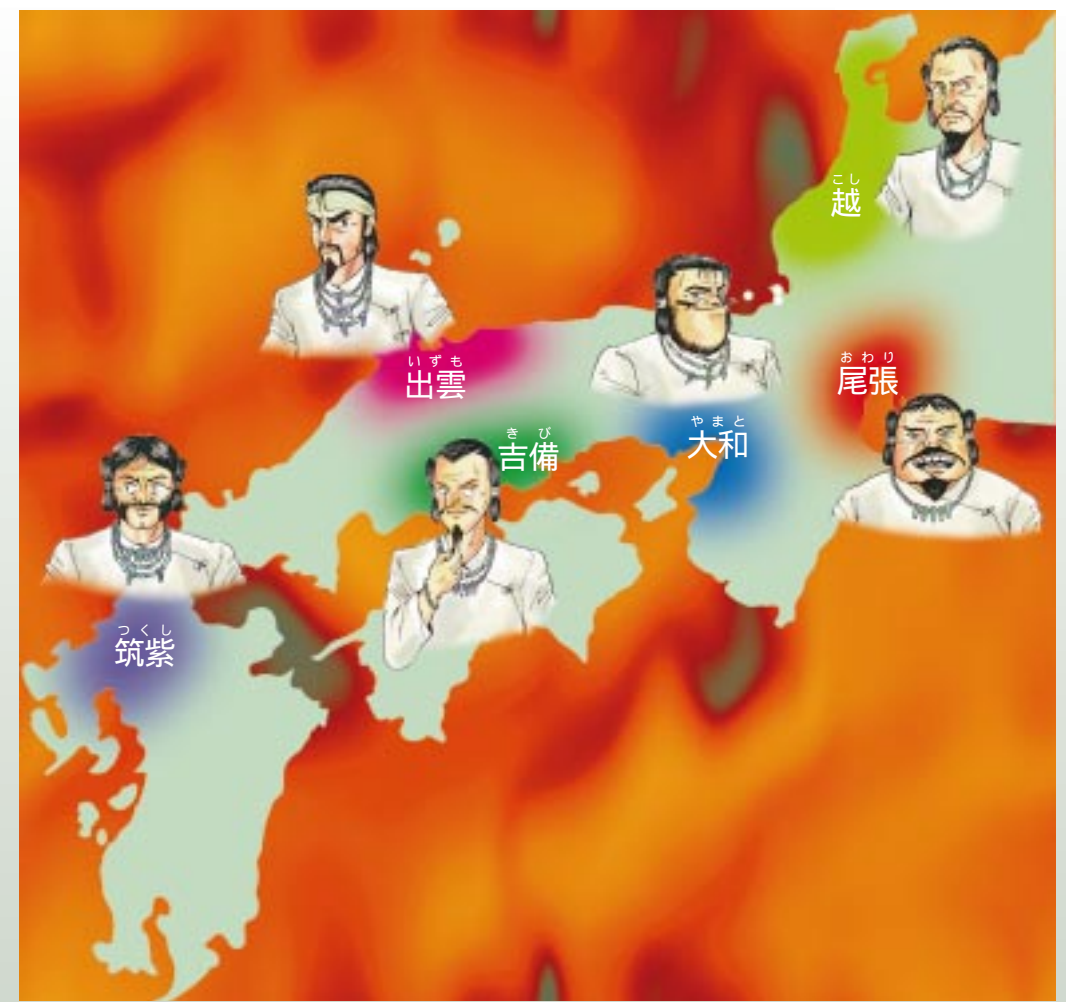
仮想ストーリー「2」作/古代島根を楽しく語る会

倭国の列強、出雲コク

今から一八〇〇年前、日本にいくつかのクニができたことである。中国の古い書物によると日本は「倭国」と呼ばれ、三〇数カ国に分かれていたと言う。強いクニが弱いクニを滅ぼす「弱肉強食の世界」、まさに太古の戦国絵巻が一八〇〇年前の日本を舞台にして繰り広げられていたのである。

戦乱の生々しい跡は今も残り、すでに一八〇〇年前、日本中が戦乱に明け暮れた時代が訪れていたことをわれわれに物語る。体中に矢を打ち込まれて死んだ戦士、深い堀に囲まれた防衛のムラ、高い山の上にある見張りのためのムラ……。これらはどのような人たちによって残された、どのような時代を物語る足跡なのだろうか。

当時、倭コクの列強と呼ばれていたのが、九州北部を中心勢力とした「筑紫」、瀬戸内海沿岸の「吉備」、近畿地方に強い勢力を持った「大和」、東日本に勢力を伸ばし



ていた「尾張」、北陸の「越」、そして山陰地方一帯を地盤としていた「出雲」の六コクであった。これらのクニはお互いに牽制しあい、巧妙な外交手段を用いて自コクの勢力を伸ばしていったのである。

やがて邪馬台国を頭とする一つの国にまとまり、大和政権によって「統一」される運命にあるクニグニだが、その道程はけっして単純なものではない。それは六大コクの一つである出雲コクにもあてはまり、この時代は島根の歴史上もっとも輝き、脚光を浴びた時代であったと言える。

この島根栄光の時代は、奇妙な形をした墓に始まる……。

銅剣から墓へ

神宝として銅剣を持つことでムラ同士の絆を固くしてきた出雲のクニであったが、やがて銅剣を捨て、強い王を中心にした「ムラ」が、今までの以上に強固な結束を持つようになりつつあった。

そのころ、中国山地の一地方に特異な墓を作る風習が生まれた。それはのちに「四隅突出型墳丘墓」と呼ばれる、四角い高まりの四隅を飛び出させ、ヒトテ状にした奇妙な墓である。周囲を石で貼り巡らし、墓専用の特別な土器をそこに供える。今までにない神秘的ムードをかもし出す墓であった。この墓はムラの首長にしか造ることが許されない。それだけにこの奇妙な墓は、出雲コクの王族を祀るにふさわしいシンボルとして採用された。



出雲コクをまとめる王のシンボルとして、墓造りは始まった。それまでには考えられない大量の土が運ばれて丘のように固められ、そのまわりには石が丁寧につきまなく貼りめぐらされていった。亡き王の眠る木棺は、神聖な色である朱の粉が一面にまかれ、中に横たわる王は豪華なアクセサリーで飾られ、出雲王の力の強大さを見せつけた。

かつて銅剣を持つことでつながっていた出雲コクはこの奇妙な形をした神秘的な墓をシンボルとしてつながり、六大国の一つと言われるほどの力を持つようになった。そして出雲コクの首座にはカンハの里の隣りにある西谷の王が立ち、ここに出雲コクが誕生した。この四隅突出型墳丘墓こそが、輝く出雲コクのシンボルであった。

広がっていく出雲コク同盟

なぜ、出雲コクが倭国の中でも力を持つことができたのか。その秘密は、他の列強コクとの同盟関係にある。なかでも早くからクニとしてまとまり、力をつけてきた吉備との同盟は、出雲コクの列強としての地位をより確かなものにしていった。

ある日、出雲の隣国、吉備コクの王から出雲に使者が届いた。

「出雲の王よ、わが娘とわが吉備の宝である特別な土器を贈る。大和ではなにやら不穏な動きがある。いつこちらに攻め込んできるとはやらわかん。お互いに手をとり合って、われわれのクニを守らうではないか」

この誘いに、出雲コクの王は承諾した。吉備コクの王の娘は、妃として、多くのお供を連れてやって来た。このときの婚礼道具の一つに吉備の特別な土器があった。吉備からやって来た、人の高さほどもあるこの土器は、吉備コクの王族の、「三種の神器」とも言われる宝であった。



出雲王は重大な儀式のときにはかならず吉備コクの土器を供え、さらに吉備コクの使者を招待して友好をよりいっそう深めていった。当時の六大コクである出雲コクと吉備コクが手を組んだのだから、他の列強に与えるその影響の大きさは言うに及ばない。

出雲コクは吉備コクとの同盟だけでなく、伯耆(鳥取)や越(北陸地方)など日本海沿岸の諸国と強い同盟関係を築いていった。その同盟のあかしが、「四隅突出型墳丘墓」と、「共通の祭り」を持つことであった。国王の死に際しては四隅の飛び出た形をした共通の墓を造り、各コクの王やその代理が集まって亡くなった王の墓を慰める。そして同時に、次期王の誕生を祝い、出雲コク同盟の固い絆を確認しあうのだ。四隅突出型墳丘墓という出雲独特の墓を共通に持つ「出雲コク同盟」は、出雲を中心に日本海沿岸、北陸まで同盟圏を広げ、破竹の勢いで勢力を拡大していった。